釣れ釣れなるままに

２００２年思い出の釣行記 PART.　５

地のものに利あり

鹿島釣狂

☆開 催 日	平成１４年１０月２０日			
☆開催場所	様似港～エリモ港			
☆入釣場所	エンルム岬			
☆潮	満潮	０２：３５	１３２㎝	
	干潮	０８：４１	５５㎝	
☆天　候	快晴　北西の風　微風　朝方３度　べた凪			
☆釣　果	アブラコ	３７１	㎜	４
	ソイ	１９５	㎜	１
	重量	１８０	０ｇ	
☆成　績	合計点数	７４６	点	
	成績	５	位	
	持ち点	６	点	
	累計点	２０	点（①⑤⑧⑥）	

カニ三昧とタバコ三昧

出発日は朝からのんびりと釣行の準備することができた。女房は私の釣行に合わせて友人と八雲方面のカニ三昧の温泉旅行に出掛けて行った。静まり返った居間中に釣り道具を引っ張り出し、仕掛けにあれこれと手を加える。居間では絶対禁止の煙草にも誰はばかる

事なく火をつける。いつもは地下室や屋外でやっていたエサの仕込みもストーブ前でカツオやイカゴロを溶かし、台所でゆるりと捌く。居間に充満した悪臭は女房が帰ってくるころにはおさまっていることだろう。女房が出掛ける前に用意していた昼飯のおかずを肴にビールで一杯やる余裕もある。午後からは何もすることがなく微睡（まどろ）んで、集合場所にはいつもより早く着いてしまった。

仲間が一人先行しており、家の中でうろうろとして家族に疎（うと）まれるよりはマシと出てきたらしい。何処（いずこ）も同じか。家族のためにあくせく働いて、唯一の道楽である釣りに出掛けるのだ。そんな時ぐらい、火打ち石で安全を祈願するまでとは言わなくとも、三つ指ついて「行ってらっしゃいませ」とやってほしいものだ。まぁ、現代の世知辛い世の中、自由に出してくれるだけでも善しとせねばなるまいか。

遠浅の砂浜で

入釣したい山中は、いまだトンネルの工事中のため入釣禁止である。昨年と同じく、吉井氏と共に様似でもう一度挑戦することにする。昨年は吉井氏が優勝で私は３位入賞であった。今年は吉井氏の入釣した砂浜で一緒に並んで竿を出して見ようと思う。この場所は潮を見極めることが大変難しく、時間帯によって釣果に極端な差がでると言う。吉井氏からその潮の塩梅（あんばい）を丁寧に聞かされたが忘れてしまった。

吉井氏と共に会所前でバスを降りた。妙に青白くぼんやりとした砂浜に向かって行くと先客がいる。挨拶を交わすと名人会の若い釣り人である。吉井氏が昨年入釣したあたりにデンと構えているので、吉井氏がその御仁の左に、私は右に入って丁度挟むような形になった。

ザクザクとした目の粗い砂浜ではなく、細かな粒子がピシッと張りつめ、足跡もつかないような渚である。遠浅であり海が凪なので浅い海を漕いでどこまでも出て行くことが出来る。白い半月が出ていた。ひたひたと僅かに起こる波が細かく震えては足元を掠（かす）めていく。茫然と波を見ているうちに、私は月と呼吸し合っているような気分になってきた。月の重力が自分の心臓を動かしているのだ。月に向かって手をかざしてみたが当然、月の光に熱を感じることは無い。

渚から５０ｍ程を竿を担ぎ海水を漕いで、アカハラ仕掛けを近投する。普段なら大遠投である。アカハラが居着く場所となるような駆け上がりは無く、闇雲に一点集中で振り込む事にする。しかし、広い海を５０ｍも沖に出るので、同じところに打ち込んでいるものなのかは定かでない。背後の山間にある建物の景色を見ながら海の中を進むのである。海に入って、ネット仕掛けを中投する。普段なら大々遠投である。海に入って、一本針仕掛けを遠投する。普段なら大々々遠投であろう。岸からの距離にすると菅原隆氏にも負けないことであろう。

右方向に近投した仕掛けが届く所には横根があるのか根がかりする。遠投にも少し根がある。しかし、仕掛けが取られるような大きなものではなく、岩盤の上に砂が少し乗って

いるというような感じである。中投の底は砂である。

右方向の横根からアタリが頻繁に出る。あがってきた２５㎝程のハゴトコを掴むとパンパンに膨らんだ腹から青白い卵が零（こば）れる。パタパタとしたアタリでハゴトコが続いた。なかなかのいいアタリが出た後、３５㎝程のドンコが来た。赤茶色のヌメッとした体をドローンと砂浜に横たえた姿は、どうしてお前はアブラコに変身しないのだという気持ちにさせられる。

右舟揚場方向に２個のキャップライトの明かりがチラチラしている。アタリが出ないので、様子を伺いに向かう。どちらも入釣してから１時間以上は経過しているのに「今来たばかりです。」の返事である。私もよく使う言葉だが「今来たばかりです」と言われて見るとその先が続かない。何度かここに入釣した経験があるのかを聞いてみる。どちらも「初めてだ」との返事である。そう言われてみるとその後が続かない。煩（わずら）わしい相手を煙に巻くのはこの手に限ると納得する。

とぼとぼと帰って来て再度、遠投を繰り返す。竿先のもぞもぞとした動きの後、竿を引き込むアタリが出た。時々頭を振って横に走るのでドンコではないはずだ。３５㎝程の黄色っぽいウサギアイナメが来た。続けて本アブラコ３０㎝も来た。いよいよ潮が引き始めてこれからだと思わせるがその先が続かない。大きなドンコの中に交じって釣れるのはハゴトコの小物ばかりである。

２０㎝程のソイが来たがこれが嫁となるようでは情けない。名人会の若者はハゴトコ１匹でどこぞへか雲隠れしてしまった。吉井氏はアタリさえ出ないようである。

脚立釣り

何度も何度も浅海を漕いで投竿していると、この海に脚立を立てて釣りたい気分になってくる。脚立に細工をして竿立てを作り、仕掛けを振り込んだ後は脚立の上に座ってのんびり待つという趣向だ。狭い場所での投げ釣りの作業を考えると、果たしてのんびりできるかは疑問だが、竿の振り込み毎に、一々、陸（おか）まで戻って行くことを考えればはるかに時間のロスを防げる。脚立にエサや魚籠（びく）、道具入れなどをぶら下げる等の工夫はできるだろう。ヘラブナ釣りを想像していただければよい。

鱚（きす）の脚立釣りというのがあるそうである。東京湾の浅海のみで行われる特殊な釣りであったが、砂浜をコンクリートで固めた今では過去のものとなってしまったであろう。この脚立釣りは舟で浅い海をある深さまで行って、そこで船頭から脚立を立ててもらうのである。脚立の高さは８尺～９尺を普通としている。この脚立釣りは八十八夜から盂蘭（うら）盆までが季節で盂蘭盆を限りに舟を出さぬ習慣になっているということである。また、この釣りは封建時代からの風習があり、作法を知らぬと素人だと疎（うと）まれるらしい。

船頭が船から脚立を下ろしてくれると、座布団を敷いて脚立に座る。綱魚籠は鱚が釣れるまで畳んだままにしておく。鱚が釣れたら初めて下ろすのが不文律になっている。それ

は、綱魚籠の下ろし具合でその場所が釣れるか釣れないかを船頭が判断し、後から来たお客を釣れる場所に案内するというのである。たとえ鯛が釣れてもそれは外道であり綱魚籠を下ろしてはならない。私たちの釣り会の審査方法である２魚種ではままならないが、こんな風流な釣りができたのも昔の事だろう。

あまりにもアタリが出ないとついついこんなことを考えてしまう。吉井氏も手持ち無沙汰の様子なのでそのことを話そうかとも思ったが、一蹴されるだろうと思ってやめた。そして、また、黙々と竿を担いでは浅海を漕ぐ動作を繰り返すのである。

海からの贈り物

明るくなってさた５時にエンルム岬に移動する。同時に仲間の相馬氏がやって来た。エンルム岬の左についたクシの歯状の溝でアブラコ、カジカを上げたがアタリがなくなって移動して来たと言う。彼は左先端に竿をセットした。

私が昨年カジカをゲットした盤はいまだ潮が高く乗れそうもない。その盤から下がった右側に竿をセットする。間もなく様似漁港方向から一人二人と移動して来て、７名ほどが岬先端に展開した。

根がかりばかりを繰り返す。海草がないのだ。鋭利な岩がゴツゴツとしているのであろう。簡単に仕掛けや道糸が切れてしまう。

潮が引いた平らな岩盤には、縁が小刻みに湾曲した手の乎大の白い貝がへばり付いている。手で掴もうとするが岩と岩の透き間にぴったりと張り付き外れない。荷物入れからドライバーを取り出して穿（ほじ）くってみる。同じ形の貝の鋳型を岩盤に残してコポッと岩から剥がれる。幾重にも黒と白の縞模様が重なった二枚貝である。ドライバーを貝の口の僅かな透き間に差し込んでこじ開ける。白くブックリとした肉が現れ、それを口に頬張る。磯の芳香を漂わせ塩味の利いた肉汁が口の中一杯に広がる。これはいける。同じ貝が盤の一面に張り付いているのを確かめてからリュックの中からワンカップを取り出した。盤の上をあちこちとさ迷いながら貝の口にドライバーを差し込んでいく。その都度、海からの芳醇な贈り物に舌鼓を打つ。喉元を流れ込んでいく酒がまた格別に旨い。

竿をほっぽりだして彼方此方うろつき回っている私を見て、相馬氏が怪訝（けげん）な顔を向ける。早速、その貝の肉を海水で洗って味付けし、相馬氏にも勧めてみる。すると、彼も私と同じ動作を繰り返すことになった。荒海の怒涛にまみれて育ったものには養殖物とは違った格別の風味がある。

地のもの

小学１年生ぐらいの女の子を連れ、ポリバケツを持ち、干潟遊びにやって来た御仁がいる。彼らは干潟に残った僅かな潮溜まりに手を入れて盛んに何かを採取している。近づいてよく見るとハマグリに似た二枚貝である。聞くとバカ貝ということである。その量は小さなポリバケツの半分ぐらいにもなろうか。

私も潮溜まりにある細長い海草を引き抜いてみる。同じ形の貝がいるにはいたが、私にはそれよりも海草の根の回りについて泥の中で動き回る虫に目が引き寄せられた。イソメである。養殖物の灰色がかったイソメとは違って、茶褐色を帯びた腹を持ち、背中には濃い緑色を乗せたものである。しかし、腕にした時計に目をやると終了時刻を迎えていた。

相馬氏は過去の釣り大会で、地元の子どもから購入したイソメを使ったことがあると言う。法外な値段を吹っかけられたが、その結果は誠に見事なものであり入賞を果たしたのである。釣り具店で購入する養殖したものや輸入したものとは違う風味があるというのだろうか。そこに暮らす魚が、その魚と同じ生活圏である海に住む虫類には安心して食いつくということだろうか。種族は同じイソメであっても暮らしぶりが変わると微妙に違うと感ずるのは魚の防御本能というものなのだろう。地物が有利なのだ。

釣りを愛した幸田露伴の釣魚談に、「魚を釣らんとすれば魚を誘（いざな）ひ致すの道を講ぜざるべからず、魚を誘ひ致さんとすれば餌を善くせざるべからず。魚釣の術は先ず魚を誘ひ致して後起る事なれば、魚を誘ひ致すところの因となる餌に意（こころ）を注（つ）へざるべからざることは云うまでも無し。古語にも、好餌（こうじ）の下大漁ありと云わずや。」と言うに相応しい餌は地物というところか。野菜なら地物だが虫ならなんと言えばよいのだろう。『地虫』ではちょっと意味合いが違うような・・・。その有利な地物を使用する機会を見いだせぬまま終焉を迎えた。

審査結果

優　勝	岡　英成	１４６２点（カジカ　４８０㎜+アブラコ３１４㎜+６６８０ｇ）	幌　満
準優勝	嵐　光博	１０５７点（カジカ　４００㎜+アブラコ２６５㎜+３９２０ｇ）	白里谷
３　位	堀内正博	９０７点（カジカ　３９０㎜+アブラコ２６２㎜+２４７０ｇ）	旭
４　位	島　強二	７８０点（カジカ　４０１㎜+アブラコ２２３㎜+１５６０ｇ）	琴似
５　位	山岸　伸	７７０点（カジカ　３５７㎜+アブラコ２８０㎜+１３３０ｇ）	上近浦

岡氏は前回、前前回と２連勝しており、今回と併せて３連勝という快挙である。これで、岡氏の年間総合優勝は決まった。今回は彼を除いては低い点数が続き、私は７４６点（アブラコ３７１㎜＋ソイ１９５㎜＋１８００ｇ）でありながら第６位という成績であった。

今年の大会は、残すところ後１回である。２回を欠席しているため、７回の大会のうちの５回で争われる年間総合順位に届くためには次回に懸けるしかない。今のところ不参加点数１回分の５０点を加えると成績はどん尻の方だが、次回の成績如何では上位入賞も見込めるところだ。年間総合には絡めなくても大物賞だけは誰にもチャンスがあるのでそれを頂戴しようか・・・。

終わり